“The Altar of the Dead” における意識の表現と自由間接話法[1)]

大　場　厚　志

The Expression of Consciousness and Free Indirect Speech in “The Altar of the Dead”

Atsushi OBA

Henry James は視点的人物の意識を中心に物語を展開させることが多い。彼の「幽霊・幻想もの」の一つに数えられる “The Altar of the Dead” (1895) にも，George Stransom という視点的人物が登場し，物語は彼の意識を中心に展開していく。Stransom は視点的人物であるが一人称の語り手ではないので，彼の意識の表現には様々な文体的特徴が見受けられる。そして，この短編における意識の表現で特徴的なものの一つは，自由間接話法 (free indirect speech) である。この話法は直接話法や間接話法と同様，発話と意識の両方を再現するものであるが，この短編では意識の再現において特徴的である。この話法はこれを重要な表現手段とした意識の流れの小説によってひろく知られるようになったのであるが，意識の流れの小説に影響を与えた James であれば，意識の再現にこの話法が効果的に用いられているのもうなずけることであろう。この小論では，“The Altar of the Dead” における意識の表現手段としての自由間接話法の機能を探ることで，この短編への一種の文体論的アプローチを試みたい。[2)]

“The Altar of the Dead” において自由間接話法が効果的に用いられているのは，第Ⅷ章であるが，その章に至るまでにも時折この話法が用いられている箇所が見受けられる。第Ⅰ章から第Ⅵ章までは，Stransom が祭壇にロウソクを灯して死者を供養すること，彼と Acton Hague とのこと，祭壇で喪服の婦人と知り合い交際を深めていくことなどが語られる。そして第Ⅵ章は，喪服の婦人が供養する相手が Hague であると判明したところで終わっている。ここまでは Stransom の意識の表現は主として語り手のナレーション(＝地の文)によってなされていて，その合間に自由間接話法による彼の意識の再現が数箇所見られる程度であるが，それらはこの短編を解釈するうえで大きな意味をもつ箇所を含んでいるように思われる。まずそのような箇所から見てみることにしよう。

Stransom はかつての恋人である Mary Antrim の供養をしているが，次第に彼が供養する死者の数が増えていく。彼が死者を供養する態度には，死者には見向きもしないこの世の現実主義や物質主義や精神性の無さに対する反発が窺われる。死者を供養しているうちに彼の精神的

空間に祭壇が姿を現す。次に引用するのは，その祭壇にかかわる描写の一部である。

> He had no imagination about these things but that they were accessible to any who should feel the need of them. *The poorest could build such temples of the spirit—could make them blaze with candles and smoke with incense, make them flush with pictures and flowers. The cost, in the common phrase, of keeping them up fell wholly on the generous heart.* (イタリック体は筆者)[3)]

この引用の“The poorest”以下の部分は，“The poorest”という最上級と“generous”という語が主観的意味合いを帯びている。しかも最初の文が，それ以下の文が彼の“imagination”の続きであることを示唆している。これらから“The poorest”以下の部分は，彼の意識を表す自由間接話法ではないかと考えられる。自由間接話法と断定することには異論もあるかもしれないが，少なくともこの部分が彼の意識に入り込んでいることにはちがいない。そしてこの場合，そこに彼の現実的な金銭感覚を表す「費用」という語が現れるところに，現実社会に反発する彼の意外な現実性が透けて見えることになり，このあと彼のそのような性質に読者の注意を喚起するきっかけになっている。事実，このあと祭壇を借り切る場面や，自分の死後にも祭壇を維持してくれるよう喪服の婦人に依頼する場面に，彼の現実的な金銭感覚が一層反映することになるのである。そして彼のこの意外な現実性は，最後のロウソクを灯すために超越しなければならないものの一つであり，その意味でここに示した自由間接話法の部分は，“The Altar of the Dead”を解釈するうえで意味のある箇所であると思われる。

次にとりあげるのは第Ⅵ章の終わりの部分である。喪服の婦人は長い間 Stransom を自分の家へ寄せつけなかったが，彼女の叔母の死後ようやく彼を部屋へ入れてくれる。それは彼にとって待ちに待った喜びの瞬間だったのであるが，そのとき彼は部屋の中にHagueの肖像画を見つけて愕然とする。

> Then Stransom understood, while the room heaved like the cabin of a ship, that its whole contents cried out with him, that it was a museum in his honour, that all her later years had been adressed to him and that the shrine he himself had reared had been passionately converted to this use. *It was all for Acton Hague that she had kneeled every day at his altar. What need had there been for a consecrated candle when he was present in the whole array* ? The revelation so smote our friend in the face that he dropped into a seat and sat silent. (34-35. イタリック体は筆者)

この引用の第二文と第三文は自由間接話法と考えられる。まず，第一文の“understood”が，それ以後の文の内容が Stransom の理解したことであるということを示唆している。第三文は

疑問文であることが，そして第二文の“all”や“every day”と第三文の“whole”のような誇張表現が主観を表していることが，これらの文が自由間接話法であることの指標となっている。（第四文はこの話法ではない。Stransom が自分を指して“our friend”という呼び方をするはずがない。“our friend”という言い方は明らかに語り手の視点からのものである。）したがって，第四文の“The revelation”は，Stransom の意識の中におけるものであって，必ずしも客観的な事実を意味するものではないということに注意しておく必要があるだろう。そうしないと場合によっては客観的な事実と視点的人物の想像とを混同してしまう危険があると思われる。

これは自由間接話法が，直接話法や間接話法と比べて，発話や意識の主体が誰であるのか読者に意識させることが少ないこと，換言すれば，語り手によるナレーション（＝地の文）と区別がつきにくいことによっている。前述のように自由間接話法が最も効果的に用いられているのは第Ⅷ章であるが，このような客観的事実と人物の想像との境界にかかわる問題は，Stransom の意識に集中している第Ⅷ章において顕在化してくることになる。そしてそれは，多かれ少なかれ主観的であることを免れない人間の認識のありようが孕む問題と無関係ではないのである。

第Ⅶ章は第Ⅵ章で喪服の婦人が供養する相手が Acton Hague であることが判明したことを受けて，彼女の部屋での Starnsom と彼女のやりとりを叙述したものである。祭壇に Hague のためのロウソクを灯すよう彼女は要求するが，彼には Hague をどうしても許すことができない。彼の方は彼女に Hague との過去を尋ねるが，彼女は頑として答えようとしない。そしてこの章は彼がドアの外へ締め出されるところで終わっている。この章では主観的で推測を表す表現に彼の意識が色濃く反映している箇所はあるものの，自由間接話法はいっさい用いられていない。直接話法で再現された彼と彼女の会話がここでは中心になっているのである。それに続く第Ⅷ章は，Stransom の意識にほぼ集中していて，第Ⅶ章とは極めて対照的なものになっている。ここにおいて，直接話法による発話の再現と自由間接話法による意識の再現が，対立的になされていると言えよう。これは外面と内面との対立に対応するものでもあるだろう。視覚と聴覚で捉えた不完全なもの——外面への不完全な認識——を手掛かりにして，未知の部分——この場合は過去——を推測するわけである。そして自由間接話法がここで効果的に用いられているのである。

以下，第Ⅷ章における自由間接話法に焦点を当てて，彼の意識とその流れを探ってみよう。次に引用するのはこの章の冒頭の部分である。

> *He had ruthlessly abandoned her—that of course was what he had done.* Stransom made it all out in solitude, at leisure, fitting the unmatched pieces gradually together and dealing one by one with a hundred obscure points. *She had known Hague only after her present friend's relations with him had wholly terminated; obviously indeed a good while after; and it*

was natural enough that of his previous life she should have ascertained only what he had judged good to communicate. There were passages it was quite conceivable that even in moments of the tenderest expansion he should have withheld. Of many facts in the career of a man so in the eye of the world there was of course a common knowledge; but this lady lived apart from public affairs, and the only time perfectly clear to her would have been the time following the dawn of her own drama. A man in her place would have "looked up" the past—would even have consulted old newspapers. It remained remarkable indeed that in her long contact with the partner of her retrospect no accident had in fact come: it had simply been that security had prevailed. She had taken what Hague had given her, and her blankness in respect to his other connexions was only a touch in the picture of that plasticity Stransom had supreme reason to know so great a master could have been trusted to produce.

This picture was for a while all our friend saw; he caught his breath again and again as it came over him that the woman with whom he had had for years so fine a point of contact was a woman whom Acton Hague, of all men in the world, had more or less fashioned. (42-43. イタリック体は筆者)

引用中のイタリック体の部分が自由間接話法の用いられている部分である。章の初めからいきなり自由間接話法で始まっているのであるが，前章（第Ⅶ章）が Stransom と喪服の婦人との会話が中心であり，しかも彼が過去を明かすのを拒否されてドアの外に締め出されるところで終わっているので，第Ⅷ章が彼の内省（推測）で始まっているのは効果的である。これらの部分を自由間接話法と見做す理由を示しておこう。第一文の "ruthlessly," "of course" という，人物の心理的，主観的な色合いを帯びた語・語句と，第二文の "Stransom made it all out" の "make out" とが，この最初の一文がこの話法であることの指標となっている。また，"make out" は，この第二文の後に続くかなり長い部分がこの話法であることの指標にもなっている。その部分においては "make out" のほかに，"obviously," "indeed," "enough," "quite," "of course" などのような副詞（句），"conceivable" のように推測を表すもの，"remarkable" のように驚きを表すものなどが，Stransom の心の動きなどの主観を反映するもので，この話法の指標となっている。

さて，引用の第一パラグラフの最後の文であるが，これは文法的にもその他の点においても自由間接話法ではない。"Stransom had supreme reason to know" の "Stransom" という固有名詞による表現が，この文が語り手によるナレーション＝地の文であることをはっきりと示している。ところがその文は，"Stransom" という固有名詞が出てくるまでは，意味内容と文脈において，下線を付した部分に続く彼の内省（自由間接話法の文）として読める。少なくとも "She had taken what Hague had given her" は，彼の思考の続きと考えられる。章の始めから

Stransom の意識・思考と付き合っている読者には，この文もその前文までと同様，彼の意識・思考を表す形式で述べられていると思われるのがむしろ自然であろう。にもかかわらず，“Stransom”という固有名詞によって，読者は語り手のナレーションへと引き戻されることになる。また、この文中の“the picture”が，第二パラグラフ冒頭の“This picture”と照応していることにも注目するべきだろう。“This picture”で始まる文は，“of all men in the world”というような Stransom の意識を表した言い回しはあるけれども，文法的にも，意味内容の点でも，文脈からも，語り手によるナレーションである。とくに Stransom を“our friend”と呼ぶのは語り手による表現以外には考えられない。したがって，“the picture”と“This picture”の照応は，“the picture”を含む文もナレーションであることを示唆している。さらに“the picture”は，Hague が作り上げてきた（描いてきた）と Stransom が考える彼女の肖像であり，それは自由間接話法で再現されている Stransom の思考・推測を一言で要約的に言い換えたものであるので，これはこの場合には Stransom の意識に浮かんだ言葉と考えるより，語り手によるナレーションと考えた方がむしろ自然であり，そのこともこの“the picture”を含む文が語り手のナレーションであると見做す根拠の一つになるかもしれない。にもかかわらず，この文中には“supreme”という彼の主観を反映していると考えられる語も見受けられる。とすればこの文には，Stransom の意識の内と外とが奇妙なくらい混在していると言えよう。ここに自由間接話法とナレーションの境界の曖昧さが見られる。

これは一つには作者 James の側の問題であろう。James は当然のことながら視点的人物の内面描写に最も関心を払っているのであろうが，彼自身が自由間接話法にどれほどの関心を払っていたかということはそれとは別問題である。視点的人物の内面描写にはこの話法が極めて有効であり，彼の作品にはこの話法が散見されるので，彼がこれについて意識的であったと考えてもいいだろうと思われる。だがいま問題にしている箇所においては，意味内容だけでなく，“supreme”とか“so great a master”——Acton Hague に対する Stransom の皮肉や嫌悪感を表す——というような人物の主観を表す表現にもかかわらず，ナレーションに引き戻している。ところがどう考えてもその必然性が乏しい。絵画に造詣が深く，作中に絵画のイメージを導入することもめずらしくなかった James であるので，おそらくここで“a touch in the picture”という絵画の表現をしたかったのだろう。作家のそのような絵画好みの傾向が，このような自由間接話法とナレーション——意識の描写と客観的な描写——との，そして，人物の意識の内と外との，境界の曖昧さを生じさせた一因ではないだろうか。

とはいっても，自由間接話法とナレーションの境界の曖昧さは，自由間接話法の再現する Stransom の意識・思考とナレーションが表すもの——言い換えれば彼の想像と現実——との境界の揺らぎを必ずしも意味するものではない。語り手によるナレーションそのものが視点的人物である Stransom の意識を述べている場合が多く，彼の意識と極めて近い関係にあるので，両者の境界の曖昧さは，彼の意識の表現というレヴェルにおいては，それほど問題にする必要

はなく，両者が相乗的に視点的人物の意識を表し，かつ読者の関心を彼に集中させていると解釈することも可能だろう。そもそも自由間接話法という表現法自体が，直接話法や間接話法と比べて，発話や思考の主体が誰であるのか読者に意識させることが少ないという特性をもっている。換言すれば，この話法はナレーションとの境界が若干曖昧にはなるが，そのぶん話法とナレーション相互の移行がスムーズになるとも言えるのである。

しかし，自由間接話法において見られる Stransom の想像と，ナレーションで語られる（あるいは語られない）現実との境界の曖昧さは，いま述べたような自由間接話法とナレーションとの境界の曖昧さとは全く別問題である。先の引用において，自由間接話法で表されていることは，Stransom が頭の中で想像し，「理解した」ことであって，必ずしも客観的な事実であるとは限らないということを，我々は忘れてはならないのである。「彼（Acton Hague）は無情にも彼女を捨てたのだ——もちろん彼がしたことはそれにちがいない」と Stransom は決め込む。そのあと彼は，彼女と Hague が知り合った時期，彼女が Hague と彼とのことを全く知らなかった理由などについて，推測する。それらはあくまで彼の独断であり，推測であって，事実とは限らないのである。これは人間の認識のありようと無関係ではない。人間の視覚や聴覚などが届く範囲はあまりにも制限されている。そして視覚や聴覚で捉えられたものが不完全であるかぎり，人間の認識にはどうしても主観が入り込むものだろう。James が幾人もの視点的人物の意識を通して探究してきたことの一つは，そのような人間の認識のありようではなかったか。とすれば，自由間接話法はそのような認識のありようを表すのに，有効な手段となっていると言えよう。

さて，いくら確信しようとしても推測でしかありえないので，彼は「彼女が彼に与えるのを拒んだ真実」(43) を推測し続ける。そして彼女の運命に思いを馳せ，彼女の精神の気高さに胸を打たれる思いがする。

> He was awestruck at the thought of such a surrender—such a prostration. *Moulded indeed she had been by powerful hands, to have converted her injury into an exaltation so sublime. The fellow had only had to die for everything that was ugly in him to be washed out in a torrent.* (43. イタリック体は筆者)

イタリック体が自由間接話法の部分と考えられる。イタリック体の最初の文においては，主観的色合いの強い“indeed”と，“to have converted～”の“to”が判断の根拠を表す不定詞（副詞的用法）であることが，この文が自由間接話法であることの指標である。また，最初の“Moulded”が先の長い引用の最後の文の“fashioned”と対応していることも，見逃してはならない。先の引用において，Stransom は彼女と Hague との過去について推測をめぐらすが，そのとき「人もあろうに Hague が彼女をいくぶんかは造りあげたのだ（fashioned)」と「思っ

た」。そして、“fashion”が“mould”に替わっていることによって，外形を造るイメージ——その少し前のところで“plasticity”という造形芸術的な用語も示すように——から外面だけでなく内面（性格）をも作るイメージへと変化してはいるが，“fashion”と“mould”の対応は，先に引用した第Ⅷ章の冒頭部分で彼が「Hagueが彼女を造ったのだ」と「思った」のと同様に，「彼女（の性格）はたしかに力強い手（影響力）によって作られたのだ」と，彼が「思った」ということを示している。ナレーションで表されたイメージが，自由間接話法によって反復されるのであるが，この反復はHagueの彼女への影響力に彼がいかに強いこだわりを感じているかをよく示していて，興味深い。これほど強い影響を現在に与えている過去に対して，こだわりを捨てることなど彼にはますますできなくなるのである。

喪服の婦人の過去を推測するうちに，Stransomはどうしてこんなにも彼女の過去を知りたいと思うのか，と自問するようになる。

> He challenged himself, denounced himself, asked himself if he were in love with her that he should care so much what adventures she had had. He had never for a moment allowed he was in love with her; therefore nothing could have surprised him more than to discover he was jealous. *What but jealousy could give a man that sore contentious wish for the detail of what would make him suffer*? (47. イタリック体は筆者)

イタリック体の部分は，Stransomの意識を再現する自由間接話法とも語り手によるナレーションとも解せられると思われるが，反語による強調が，彼女を愛しているとは認めたくないものの，どうしても嫉妬心を意識せずにはいられないStransomの主観を反映しているように思われる。

彼女への愛とそれゆえの嫉妬に気づいた彼は，自己を正当化しようとする。自由間接話法で始まったこの章は，彼女とHagueに関する彼の推測と，ロウソクを立てないことの正当化が，同じ話法で語られて終わることになる。

> The more Stransom thought the more he made out that whatever this relation of Hague's it could only have been a deception more or less finely practised. *Where had it come into the life that all men saw? Why had one never heard of it if it had had the frankness of honourable things*? Stransom knew enough of his other ties, of his obligations and appearances, not to say enough of his general character, to be sure there had been some infamy. *In one way or another this creature had been coldly sacrificed. That was why at the last as well as the first he must still leave him out and out.* (48. イタリック体は筆者)

イタリック体の部分が自由間接話法である。“Where”と“Why”で始まる文は，それぞれ疑問文であることが，この話法の指標となっている。その前文の“thought”と“made out”も，あとに続く文がStransomの考えである可能性を示している点で，指標であると言えよう。終わりから二つ目の文では，“coldly”という主観を帯びた表現と，“In one way or another”という推測の言い回しとが，最後の文では“must”という義務を表す助動詞や，“at the last as well as the first”という一種の強調表現が，それぞれ指標となっている。また，終わりから三つ目の文において彼が「確信した」ことの内容も，そのあとに続く文が彼の想像である可能性をあらかじめ示唆している。

「どこで」「どうして」という問い掛けが示すように，彼には彼女とHagueの関係について具体的な知識はない。彼にできるのは，視覚や聴覚で捉えられた断片を手掛かりにして想像・推測することだけである。(そしてここでも，自由間接話法が彼の想像・推測を効果的に表現している。) Hagueに関して「何か恥ずべきこと」があったのだと考えて，彼はここでも彼女が「冷酷にも犠牲にされたのだ」と推測する。そして最後に，「…なおも彼 (Hague) を締め出し続けねばならないのだ」と，Hagueのロウソクを立てないことを正当化するのである。死後もなお彼女に強い影響力をもち続けているHagueに嫉妬を感じざるをえない彼にとっては，彼女はHagueの犠牲者でなければならない。そうでないと彼の自我が満足しない。結局のところ，この章における彼の意識に現れているのは，Hagueが彼女にひどい仕打ちをしたと見做すことによって，自己を正当化することなのである。そしてこれは，視覚や聴覚で捉えられた断片からなされた彼の認識のありようがいかに主観的なものであるかを，はっきりと示していると言えよう。[4)]

しかし，Hagueのためのロウソクが灯されないかぎり事態は解決しないので，このような自己正当化は解決をもたらさない。最終章である第Ⅸ章では，その後半部分において幽霊という超自然の力が導入されることによって事態は解決の方向に向かうことになるが，そこに至るまでは思い悩むStransomの意識・思考がたどられていく。次に引用するのは，彼がまた足繁く祭壇を訪れるようになったときの叙述の一部である。

> He sat and wondered to what he had reduced his absent associate and what she now did with the hours of her absence. *There were other churches, there were other altars, there were other candles; in one way or another her piety would still operate; he couldn't absolutely have deprived her of her rites.* So he argued, but without contentment;.... (51-52. イタリック体は筆者)

このときには彼と喪服の婦人との関係は冷えてしまっている。彼女はHagueのロウソクを灯すという要求を譲らず，彼はその要求をのむことができないからである。彼は祭壇のところにすわって彼女のことを考えるのであるが，その考えの一部がイタリック体のような自由間接

話法で再現されている。彼女はなんとか自分なりに信心深い気持ちを満たすだろう，と無理に思い込もうとしている彼の主観が，そこには反映している。また，イタリック体の前後の“wondered”と“argued”も，イタリック体の部分がStransomの思考を表す自由間接話法であることを示している。

だが“without contentment”とあるように，もちろんそれで自分を納得させることはできない。事態の解決にはもう一本のロウソクが不可欠なのである。そのうち彼には「調和」という考えがまといつくようになる。そしてその調和にはあと一本のロウソクが不可欠だという認識に至るのである。

> Finally... he arrived at a conception of the total, the ideal, which left a clear opportunity for just another figure. “Just one more—to round it off; just one more, just one,” continued to hum in his head. There was a strange confusion in the thought, for he felt the day to be near when he too should be one of the Others. *What in this event would the Others matter to him, since they only mattered to the living ? Even as one of the Dead what would his altar matter to him, since his particular dream of keeping it up had melted away ? What had harmony to do with the case if his lights were all to be quenched* ? What he had hoped for was an instituted thing. He might perpetuate it on some other pretext, but his special meaning would have dropped. This meaning was to have lasted with the life of the one other person who understood it. (53-54. イタリック体は筆者)

イタリック体の部分が，彼の“a strange confusion in the thought”を表す自由間接話法である。「奇妙な混乱」がこのような問い掛けとなって彼の意識に現れていると考えられる。さらにこの場合は，引用部分の直前に，“There were... moments in which he seemed to catch a glimpse of the void so sensible to the woman *who wandered in exile or sat where he had seen her with the portrait of Acton Hague.*”(53. イタリック体は筆者）という文がある。そのなかのイタリック体で示した部分は，Stransomの主観に染まったナレーションであり，彼の心の動きを表していることが，彼の思考を表す自由間接話法への移行を滑らかなものにしている。[5)]

この引用部分においては，祭壇にあと一本のロウソクがどうしても必要だという認識に彼が至ったことが示されていると同時に，そのロウソクがHagueのものであるのか自分のものであるのか混乱している彼の精神状況と，喪服の婦人との関係の回復もまた不可欠だという彼の混乱解決への方向が提示されている。そしてこのあと物語は結末をむかえるわけだが，そこでMary Antrimの幽霊の導きで心が開かれ，彼は一種の悟りに到達する。それによって彼女との関係の回復がなされることになる。ロウソクについては，彼はHagueのもののつもりで要求するが，彼女はそれを彼自身のものと誤解する。彼女が灯すことになるであろうその最後のロ

ウソクによって彼の祭壇は「調和」を得ることになるのだろうが，物語の結末を形作っている最後のロウソクに関しての彼と彼女の間の誤解は，この引用文において自由間接話法で再現された彼の意識によってすでに予示されていると言えるだろう。その意味でもこの話法が果す役割は大きいと思われる。

これまで見てきたように，“The Altar of the Dead” において自由間接話法は視点的人物である Stransom の意識を表現する手段として極めて効果的に用いられている。この短編は「幽霊・幻想もの」の一つに数えられるが，視点的人物の意識に焦点を当てれば「孤独な人間もの」の要素も強い。そして自由間接話法で再現された意識において Stransom の意外な現実性や過去への強いこだわりなどが窺え，それが彼の言動と相俟って彼の自己中心性を顕著なものにしていくのであり，そういったものゆえに彼の人生における一種の悟りが遅すぎたことになるのを思えば，この話法が物語のプロットに対して果す役割は大きい。さらに，自己の外の世界を視覚や聴覚で捉えてそこから自己の内部での認識に至るさいに，視覚や聴覚で捉えられたものが不完全であればあるほどそこに主観が入り込んでしまう人間の認識のありようの一端を，この話法で再現された彼の意識に窺えたようにも思われる。その意味でも自由間接話法は，“The Altar of the Dead” において，人間心理の探究者である James にとって重要な表現手段であったと言えよう。

注

1）この小論は，拙論「“The Altar of the Dead” の一考察——Stransom の意識と超越をめぐって——」，*Tokai Review*（東海学園女子短期大学英文学科研究室），19（1994），15－27において触れることができなかった，“Altar of the Dead” における意識の表現手段としての自由間接話法の機能に焦点を当てたものである。これはこの短編への文体論的アプローチではあるが，必ずしも文体論そのものを意図するものではないことを，あらかじめお断りしておきたい。

2）自由間接話法については，中川ゆきこ『自由間接話法——英語の小説にみる形態と機能——』（京都：あぽろん社，1983）を主として参照した。なお，この話法は描出話法（represented speech）とも呼ばれるが，ここでは中川氏の著書にしたがって自由間接話法という名称を使用した。

3）Henry James, “The Altar of the Dead,” in *The Novels and Tales of Henry James,* New York Edition (New York: Scribner, 1937), XVII, 6．以下，“The Altar of the Dead” からの引用はすべてこの版によるものとし，以降，ページ数は本文中に示す。

4）先に述べたように，第Ⅷ章は Stransom の意識に集中している。だがこの章には，彼の意識の描写の間に，自由間接話法で再現された喪服の婦人の発話が入り込んでくる箇所がある。その箇所について，彼の意識の表現とのかかわりにおいて考えてみたい。

These days of her absence proved him of what she was capable; all the more that he never dreamed she was vindictive or even resentful. *It was not in anger she had forsaken him; it was in simple submission to hard reality, to the stern logic of life.* This came home to him when he sat with her again in the room in which her late aunt's conversation lingered like the tone of a cracked piano. She tried to make him forget how much they were estranged, but in the very presence of what they had given up it was impossible not to be sorry for her. *He had taken from her so much more than she had*

taken from him. He argued with her again, told her she could now have the altar to herself; but she only shook her head with pleading sadness, begging him not to waste his breath on the impossible, the extinct. *Couldn't he see that in relation to her private need the rites he had established were practically an elaborate exclusion ? She regretted nothing that had happened; it had all been right so long as she didn't know, and it was only that now she knew too much and that from the moment their eyes were open they would simply have to conform. It had doubtless been happiness enough for them to go on together so long.* (45-46. イタリック体は筆者)

この引用箇所はStransomの意識を表す自由間接話法と考えられる文を二つ含んでいる。前半の二つのイタリック体の文がそれである。最初のものはその直後の"This came home to him..."が指標となっている。二つ目のものについては，その直前の"it was impossible not to be sorry for her"が，そのあとに続く部分がStransomの意識であることを示唆している。というのは，そのあとの文は「彼女にすまないと思わずにはいられなかった」理由を示しているからである。また，"so much more than..."という強調表現も彼の主観を反映していて，この文が自由間接話法であることの指標となっている。

さて，この引用には，"She tried to make him forget..."とか"...begging him not to waste..."といった箇所から分かるように，彼が彼女と会話を交わしたことが示されている。そして彼女の発話は直接話法で再現されることなく，その一部が三つ目のイタリック体の部分のような形で，自由間接話法で表現されている。これはまず前文中の"begging"以下が，それからイタリック体の第一文は疑問文であることが，第二文と第三文においては，"nothing,""all,""only,""too,""doubtless,""enough,""so long"といった主観的・感情的色合いの強い語（句）が，それぞれ指標となっている。

それにしてもここで彼女の発話が自由間接話法で再現されているのはなぜなのだろう。これまで彼女の発話は直接話法か間接話法で再現されているのである。これには自由間接話法で再現されている彼女の言葉が，彼女としては感情的なものであることとかかわりがあるように思われる。この部分に主観・感情を表す語（句）がいくつも見受けられるのは先に指摘したとおりであるが，とくに最初の疑問文は，直接話法では"Can't you see..."のような言い方で始まるのであり，そのような言い方にも，"practically an elaborate exclusion"という言い回しにも，控え目な彼女の言葉としてはかなり感情的なものを感じざるをえない。ここで第Ⅷ章がStransomの意識に集中していることを思い起こすことが必要だろう。この引用部分においても，その前半には彼の意識を表す自由間接話法が二箇所あるのは，先ほど見たとおりである。この引用の後には彼の意識のナレーションが続くことになる。このようにその前後が彼の意識や意識のナレーションで固められているときに，彼女の発話が直接話法で挿入されたとしたら，しかもこの場合はその発話が感情的な内容であるだけになおさらのこと，それは唐突と感じられるだろうし，それ以上に，彼の意識の流れを中断する結果にもなりかねない。かといって間接話法でこれだけの発話を再現するのにも困難が伴う。伝達動詞が彼の意識の流れの描写を妨げることになるだろうからである。自由間接話法は，他の話法と比べて，その言葉がだれによって発せられたのかということを読者に意識させることが少ない。すなわち，他の話法よりも自然な形で彼女の発話を再現できているのであり，そのため彼の意識の流れを妨げることが少ないのである。先に第Ⅷ章の冒頭部分におけるこの話法について，語り手によるナレーションとの境界が曖昧ではないかという指摘をしたが，その曖昧さがこの場合には意識の流れの表現という点で効果的なのである。したがって，ここで彼女の発話が自由間接話法で再現されているのは，極めて適切であると言えよう。

5）なお，イタリック体の後の部分は混乱を解決する方向を示しているが，これは自由間接話法とは考えないほうがいいだろう。とくにその部分の第二文は彼の意識とは考えにくい。"but his special

meaning would have dropped" は意味のうえで未来完了とは考えられないので，これは仮定法過去完了の主節だろう。そして仮定法は時制の一致を受けない。これを彼の意識と考えると，ここで彼が過去の事実に反する仮定をしたことになり，矛盾が生じる。「なにかほかに口実をもうけて祭壇を維持したとしても，特別な意味は消えてしまっていただろう」と，語り手が述べていると見做すべきだろう。そして，"his special meaning" はその前文の "an instituted thing" とかかわりがあり，後の "This meaning" へと受け継がれて行くことを考慮に入れると，やはりこの部分にふくまれる三つの文は，混乱を決する方向を語り手のナレーションが示していると解しておくほうが妥当だろう。